数学クォータ科目「数学」第7回(2/2)

# 行列の対角化

佐藤 弘康 / 日本工業大学 共通教育学群

# 【復習】固有値と固有ベクトル

- 正方行列 A に対し、等式  $Ax = \lambda x$  を満たす
  - $\circ$  スカラー $\lambda$ を「A の固有値」といい、
  - $\circ$  ベクトル x ( $\neq$  0) を「A の固有値  $\lambda$  に対する固有ベクトル」という.
- 求め方
  - 固有値は, 固有方程式 |A NE| = 0 の解 N.
  - 。 固有ベクトルは、連立1次方程式  $(A \lambda E)x = 0$  の解 x.
- 今回のテーマは、行列の対角化

# 「行列の対角化」とは?

例)
$$A=rac{1}{24}igg(egin{array}{ccc} 31 & 5\sqrt{3} \\ 5\sqrt{3} & 21 \end{array}
ight)$$
の固有値は $rac{2}{3},rac{3}{2}$ であり、対応する固有ベクトルはそれぞれ $x_1=igg(egin{array}{ccc} -1 \\ \sqrt{3} \end{array}
ight)$ と $x_2=igg(egin{array}{ccc} \sqrt{3} \\ 1 \end{array}
ight)$ であった.

問 2つの固有ベクトルを並べて正方行列  $P=\begin{pmatrix} -1&\sqrt{3}\\\sqrt{3}&1\end{pmatrix}$ をつくる.

このとき、3つの行列の積  $P^{-1}AP$  を計算しなさい.

解)

$$P^{-1}AP = \frac{1}{-1 - 3} \begin{pmatrix} 1 & -\sqrt{3} \\ -\sqrt{3} & -1 \end{pmatrix} \left\{ \frac{1}{24} \begin{pmatrix} 31 & 5\sqrt{3} \\ 5\sqrt{3} & 21 \end{pmatrix} \right\} \begin{pmatrix} -1 & \sqrt{3} \\ \sqrt{3} & 1 \end{pmatrix}$$
$$= -\frac{1}{4 \cdot 24} \begin{pmatrix} 16 & -16\sqrt{3} \\ -36\sqrt{3} & -36 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} -1 & \sqrt{3} \\ \sqrt{3} & 1 \end{pmatrix} = \frac{1}{24} \begin{pmatrix} 16 & 0 \\ 0 & 36 \end{pmatrix}$$

# 「行列の対角化」とは?

例)
$$A=rac{1}{24}igg(egin{array}{ccc} 31 & 5\sqrt{3} \ 5\sqrt{3} & 21 \ \end{array}igg)$$
の固有値は  $rac{2}{3},rac{3}{2}$  であり、対応する固有ベクトルはそれぞれ  $x_1=igg(egin{array}{ccc} -1 \ \sqrt{3} \ \end{array}igg)$ と  $x_2=igg(egin{array}{ccc} \sqrt{3} \ 1 \ \end{array}igg)$  であった.

問 2つの固有ベクトルを並べて正方行列  $P=\begin{pmatrix} -1&\sqrt{3}\\\sqrt{3}&1\end{pmatrix}$ をつくる.

このとき、3つの行列の積  $P^{-1}AP$  を計算しなさい.

解)

$$\therefore P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \frac{2}{3} & 0 \\ 0 & \frac{3}{2} \end{pmatrix} \leftarrow 対角行列になった$$

# 「行列の対角化」とは?

例)
$$A=rac{1}{24}igg(egin{array}{ccc} 31 & 5\sqrt{3} \ 5\sqrt{3} & 21 \ \end{array}igg)$$
の固有値は  $rac{2}{3},rac{3}{2}$  であり、対応する固有ベクトルはそれぞれ  $x_1=igg(egin{array}{ccc} -1 \ \sqrt{3} \ \end{array}igg)$ と  $x_2=igg(egin{array}{ccc} \sqrt{3} \ 1 \ \end{array}igg)$  であった.

問 2つの固有ベクトルを並べて正方行列  $P=\begin{pmatrix} -1&\sqrt{3}\\\sqrt{3}&1\end{pmatrix}$ をつくる.

このとき、3つの行列の積  $P^{-1}AP$  を計算しなさい.

別解)  $P = \begin{pmatrix} x_1 & x_2 \end{pmatrix}$  とおくと

$$AP = A\left(\begin{array}{cc} \boldsymbol{x}_1 & \boldsymbol{x}_2 \end{array}\right) = \left(\begin{array}{cc} A\boldsymbol{x}_1 & A\boldsymbol{x}_2 \end{array}\right) = \left(\begin{array}{cc} \frac{2}{3}\boldsymbol{x}_1 & \frac{3}{2}\boldsymbol{x}_2 \end{array}\right) = \left(\begin{array}{cc} \boldsymbol{x}_1 & \boldsymbol{x}_2 \end{array}\right) \left(\begin{array}{cc} \frac{2}{3} & 0 \\ 0 & \frac{3}{2} \end{array}\right)$$

# 行列の対角化

- 正方行列 A に対し、適当に正則行列 P を選んで、 $P^{-1}AP$  を対角行列に することを <mark>行列の対角化</mark> という.
- ullet 正方行列 A が正則行列  $P=\left(egin{array}{cccc} oldsymbol{x}_1 & oldsymbol{x}_2 & \cdots & oldsymbol{x}_n \end{array}
  ight)$  によって,

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \lambda_1 & & & \\ & \lambda_2 & & \\ & & \ddots & \\ & & & \lambda_n \end{pmatrix}$$

と対角化されるならば、

- $\circ \lambda_1, \lambda_2, \ldots, \lambda_n$  はすべて A の固有値で、
- $\circ x_i$  は、固有値  $\lambda_i$  に対応する固有ベクトルである.

(前のページと同様の議論より、この事実が導かれる)

# 行列の対角化の考え方

- 行列 A の固有値を <sup>1</sup>/<sub>1</sub>, <sup>1</sup>/<sub>2</sub>, ... とする.
- 対応する固有ベクトルをそれぞれ  $x_1, x_2, \ldots$  とする.
- 固有ベクトル達を並べて行列  $P = \begin{pmatrix} x_1 & x_2 & \cdots \end{pmatrix}$  をつくる.
- これらは  $Ax_i = \lambda_i x_i$  (i = 1, 2, ...) を満たすので、

$$AP = A \begin{pmatrix} x_1 & x_2 & \cdots \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} Ax_1 & Ax_2 & \cdots \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \lambda_1 x_1 & \lambda_2 x_2 & \cdots \end{pmatrix}$$
$$= \begin{pmatrix} x_1 & x_2 & \cdots \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \lambda_1 & 0 & \cdots \\ 0 & \lambda_2 & \\ \vdots & \ddots \end{pmatrix} = P \begin{pmatrix} \lambda_1 & 0 & \cdots \\ 0 & \lambda_2 & \\ \vdots & \ddots \end{pmatrix}$$

$$ullet$$
  $P$  が正則ならば,  $P^{-1}AP=\left(egin{array}{cccc} \lambda_1 & & & & \\ & & \lambda_2 & & \\ & & \ddots & \end{array}
ight)$  と対角行列になる.

# 行列を対角化する手順

- 正方行列 A を対角化するには…
  - (1) A の固有値・固有ベクトルを求める.
  - (2) 固有ベクトルを並べて正則行列  $P = \begin{pmatrix} x_1 & x_2 & \cdots \end{pmatrix}$  をつくる
  - (3)  $P^{-1}AP$  は, A の固有値を対角成分とする対角行列となる. (対角成分の並び順は, P の固有ベクトルの並び順と対応)
- ◆ 上記のようにして、行列 A が対角化できるとき、「A は 対角化可能 である」という。

# 行列の対角化に関する注意

● すべての正方行列が対角化可能であるとは限らない.

例)対角化可能でない行列の例

$$\circ$$
 回転行列  $\begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix}$ 

$$\circ$$
 せん断 $\begin{pmatrix} 1 & k \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$ 

ullet 任意の 対称行列 ( ${}^tA=A$  を満たす行列)は対角化可能である.

#### 定理.

任意の 対称行列 は、 直交行列 で対角化可能である. つまり、行列 A が対称行列ならば、 $^tPP = E$  かつ  $^tPAP$  が対角行列となるような正則行列 P が存在する.

# 対称行列の対角化の例

例) 
$$A = \frac{1}{24} \begin{pmatrix} 31 & 5\sqrt{3} \\ 5\sqrt{3} & 21 \end{pmatrix}$$
 の固有値は  $\frac{2}{3}$ ,  $\frac{3}{2}$  であり, 対応する固有ベクトル

はそれぞれ 
$$x_1 = \begin{pmatrix} -1 \\ \sqrt{3} \end{pmatrix}$$
と  $x_2 = \begin{pmatrix} \sqrt{3} \\ 1 \end{pmatrix}$ であった.

• 
$$P = \begin{pmatrix} -1 & \sqrt{3} \\ \sqrt{3} & 1 \end{pmatrix}$$
とおくと,  $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \frac{2}{3} & 0 \\ 0 & \frac{3}{2} \end{pmatrix}$ となる.

(このスライドの p.2 を参照)

• 
$$Q = \frac{1}{2}P = \begin{pmatrix} -\frac{1}{2} & \frac{\sqrt{3}}{2} \\ \frac{\sqrt{3}}{2} & \frac{1}{2} \end{pmatrix}$$
 とおくと,  $Q$  は 直交行列 で,

$${}^tQAQ = \begin{pmatrix} \frac{2}{3} & 0 \\ 0 & \frac{3}{2} \end{pmatrix}$$
が成り立つ.

- (1) 固有値と行列式の関係 正方行列 A が対角化可能であるとき, A の行列式の値は, n 個の固有値の積に等しい.
  - (x) A が正則行列 P で対角化されたとする. つまり、

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \lambda_1 & & & \\ & \lambda_2 & & \\ & & \ddots & \\ & & & \lambda_n \end{pmatrix}$$

- 対角行列は三角行列なので、行列式の値は対角成分の積に等しい.
- 行列式の [性質 7] より,

$$|P^{-1}AP| = |P^{-1}||A||P| = |P^{-1}||P||A| = |P^{-1}P||A| = |E||A| = |A|.$$

• 以上のことより、 $|A| = \lambda_1 \lambda_2 \cdots \lambda_n$  を得る.

#### (2) 正方行列の m 乗の計算

$$\circ P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \beta \end{pmatrix}$$
のとき、両辺の $m$ 乗 ( $m$ 個の行列の積)をとると、

$$(P^{-1}AP)^{m} = \underbrace{(P^{-1}AP) \times (P^{-1}AP) \times \cdots \times (P^{-1}AP)}_{m \text{ 個}}$$

$$= P^{-1}A(PP^{-1}) \cdots (PP^{-1})AP = P^{-1}AE \cdots EAP$$

$$= P^{-1}\underbrace{A \times A \times \cdots \times A}_{m \text{ 個}} P = P^{-1}A^{m}P,$$

$$\left(\begin{array}{cc} \alpha & 0 \\ 0 & \beta \end{array}\right)^m = \left(\begin{array}{cc} \alpha^m & 0 \\ 0 & \beta^m \end{array}\right).$$

。 よって、
$$A^m = P \begin{pmatrix} \alpha^m & 0 \\ 0 & \beta^m \end{pmatrix} P^{-1}$$
 である.

#### 2次形式の標準化

○ 2次形式  $ax^2 + 2bxy + cy^2$  は行列の積を用いて, 次のように書ける;

$$ax^{2} + 2bxy + cy^{2} = \begin{pmatrix} x & y \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a & b \\ b & c \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x & y \end{pmatrix} A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$$

 $\circ$  行列 A は 対称行列 なので、 直交行列 Q を用いて対角化できる;

$${}^{t}QAQ = \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \beta \end{pmatrix}$$

。このとき、

$$ax^{2} + 2bxy + cy^{2} = \begin{pmatrix} x & y \end{pmatrix} A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x & y \end{pmatrix} Q \begin{pmatrix} tQAQ & tQ & x \\ y \end{pmatrix}$$
$$= \begin{pmatrix} X & Y \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \beta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} X \\ Y \end{pmatrix} = \alpha X^{2} + \beta Y^{2}$$

数学クォータ科目「数学」(担当:佐藤 弘康)12/14

- (4) **2変数関数** f(x,y) の極値の判定  $f_x(a,b) = f_y(a,b) = 0$  を満たす点 (a,b) に対し, D(a,b) の符号で, f(a,b) が極値か否かを判定した.
  - F(t) = f(a + ht, b + kt) をおくとき, F''(0) の符号が本質的である.

$$F''(0) = f_{xx}(a,b) h^{2} + 2f_{xy}(a,b) hk + f_{yy}(a,b) k^{2}$$

$$= \begin{pmatrix} h & k \end{pmatrix} \begin{pmatrix} f_{xx}(a,b) & f_{xy}(a,b) \\ f_{xy}(a,b) & f_{yy}(a,b) \end{pmatrix} \begin{pmatrix} h \\ k \end{pmatrix}$$

$$= \begin{pmatrix} H & K \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \beta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} H \\ K \end{pmatrix} = \alpha H^{2} + \beta K^{2}.$$

- よって, f(x, y) のヘッセ行列の固有値 α,β が,
  - $\circ$  どちらも負ならば, f(a,b) は極大値である.
  - $\circ$  どちらも正ならば, f(a,b) は極小値である.
  - $\circ$  符号が異なるとき, f(a,b) は極値ではない.

# 今回(第7回講義)のまとめ

- (1) 固有値・固有ベクトルの定義  $Ax = \lambda x$ 
  - 固有値・固有ベクトルの求め方
  - 固有方程式 |A → → E| = 0
- (2) 行列の対角化
  - P<sup>-1</sup>AP が対角行列になる場合、
    - その 対角成分 は A の固有値であること.
    - $\circ$  正則行列 P の 列 は A の固有ベクトルであること.